
［成果情報名］カキにおけるフジコナカイガラムシ交信撹乱剤を基幹とした防除体系
［要約］カキ圃場でフジコナカイガラムシ交信撹乱剤を 100 本/10a 設置する防除体系は、フジコナカイガラムシを対象とした６月までの殺虫剤散布を慣行から４剤程度削減した条件下でも高い防除効果を示す。
［キーワード］カキ、フジコナカイガラムシ、交信撹乱剤、性フェロモン、防除体系
［担当部署］病害虫部；病害虫チーム
［連絡先］092-924-2938
［対象項目］果樹　　［専門項目］病害虫　　［成果分類］技術改良

［背景・ねらい］

カキを加害するフジコナカイガラムシは果実とヘタの隙間などに好んで寄生するため、散布した殺虫剤の薬液がかかりにくく、殺虫剤による防除が難しい。これに対し、フジコナカイガラムシ交信撹乱剤（以下、交信撹乱剤）はフジコナカイガラムシに対して高い防除効果が期待される。そこで、交信撹乱剤を設置したカキ圃場において殺虫剤散布を削減した防除体系の効果を明らかにするとともに、その体系に要する資材費について評価する。

［成果の内容・特徴］

１．前年の秋季にフジコナカイガラムシの密度が十分低下したカキ圃場において、交信撹乱剤を３月下旬に 100 本/10a 設置することで、６月までの本種を対象とした殺虫剤散布を４～６剤削減しても高い防除効果が得られる（表１、図１）。

２．交信撹乱剤を 100 本/10a 設置する場合、本種を対象とした殺虫剤散布を３剤以上削減できればフジコナカイガラムシ防除にかかる資材費を慣行の防除体系よりも低く抑えることができる（データ略）。

［成果の活用面・留意点］

１．カキのフジコナカイガラムシ防除技術として活用できる。

２．交信撹乱剤の防除効果については令和３年度成果情報「カキのフジコナカイガラムシに対する交信撹乱剤の防除効果」も併せて参照する。

３．フジコナカイガラムシの密度が高いと十分な防除効果が得られない可能性があるため、交信撹乱剤を初めて設置する圃場では殺虫剤散布との併用を基本とする。前年秋季に本種が低密度であること（収穫時における被害果率１％未満を目安）を確認した圃場で殺虫剤の削減を実施する。

４．枝葉が込み合っているような圃場では交信撹乱剤の防除効果がやや劣る事例があることから、枝葉が込み合わないよう適切な管理に努める。

５．これまでの試験では殺虫剤を削減したことによる害虫の多発生は認められていないが、場合によってはフジコナカイガラムシ以外のカイガラムシ類などが発生する恐れがある。その場合は殺虫剤散布による補正防除を行う。

［具体的データ］

表１　交信撹乱剤区と慣行防除区の殺虫剤散布実績（令和３～７年）

令和3年	令和4年	令和5年	令和6年	令和7年
3/25 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	3/24 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	3/28 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	3/28 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	3/27 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤
4/9 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	4/15 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	4/9 ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ水和剤	4/13 ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ水和剤	4/16 ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ水和剤
4/23 ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ水和剤			4/23 ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ水和剤	4/29 ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ水和剤
5/18 DMTP水和剤[注)5]	5/20 ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ水和剤	5/22 ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ水和剤	5/17 ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ水和剤	5/23 ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ水和剤
5/31 ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ水和剤				
6/14 ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ水溶剤	6/2 ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ水溶剤	6/3 ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ水溶剤	6/2 ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ水溶剤	6/4 ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ水溶剤
6/29 DMTP水和剤[注)5]	6/16 ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ水和剤	6/17 ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ水和剤	6/15 ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ水和剤	6/18 ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ水和剤
7/16 MEP水和剤	7/7 ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ水溶剤	7/2 ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ水溶剤	7/5 MEP水和剤	7/3 ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ水溶剤
	7/22 MEP水和剤	7/16 MEP水和剤	7/28 ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水和剤	7/22 MEP水和剤
8/5 ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水和剤	8/9 ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水和剤	8/6 ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水和剤	8/7 ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水和剤	8/12 ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水和剤
8/25 ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ水和剤			8/9 ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ水溶剤	8/30 ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ水和剤
			8/26 ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ水和剤	
9/11 ｼﾗﾌﾙｵﾌｪﾝ水和剤[注)5]			9/5 ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ水和剤	9/19 ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ水和剤
9/16 ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ水和剤			9/27 ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ水和剤	
				10/5 ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ水和剤

注)1. 前年の秋季(収穫期)にフジコナカイガラムシの密度が低いことを確認した現地カキ園において実施。
2. 交信撹乱剤区:約30a(令和3､4年は約80a)、慣行防除区:約10a。品種はいずれも「富有」。
3. 交信撹乱剤区では毎年3月下旬にフジコナカイガラムシ交信撹乱剤100本/10aを設置。
4. 慣行防除区では上記殺虫剤を散布。交信撹乱剤区では網掛けの殺虫剤散布を除いて散布。
5. 令和8年2月現在、農薬登録失効。

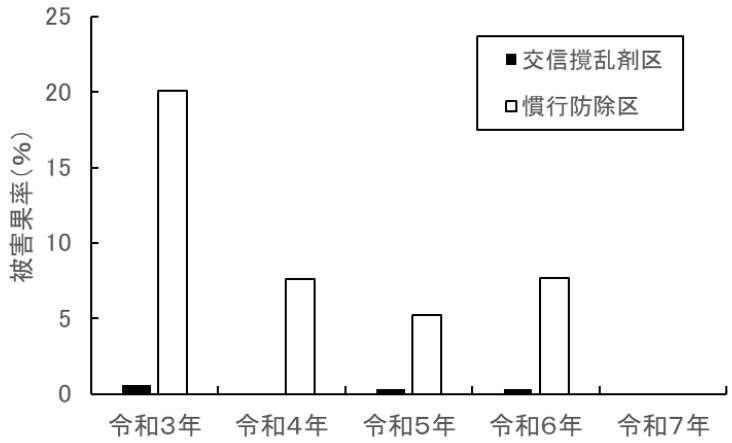


図１　交信撹乱剤区と慣行防除区の被害果率（令和３～７年）

注）1. 10月下旬頃に各区約300果を調査（品種「富有」）。
2. フジコナカイガラムシ寄生果と本種による果実障害（すす病、火ぶくれ症）果を被害果として、その割合を算出。
3. 令和７年を除き両区間に有意差あり（Fisherの正確確率検定,$p<0.001$）。

［その他］

研究課題名：新開発農薬・資材等の適応性検定試験
予 算 区 分：民間等受託
研 究 期 間：令和３、４、５、６、７年度
研究担当者：清水信孝、伊丹春衣、小田あさひ、海口直弥、菊原賢次、上村香菜子